

# 国際交流基金助成事業報告書

薬学部 3年次生 吉田 舞衣

ナポリほど“LUOGHI COMUNI”という言葉の期待に応え、そしてそれを裏切ってくれる街は存在しないように思う。2週間のイタリア、ナポリでの短期留学を通して生きたナポリに触れたことは私に、もちろんいい意味で、たくさんのショックを与えてくれた。

「ナポリは危ない」。

私のナポリ留学宣言に対し、例に違わず聞かされたレスポンスがこれである。その派生として「絶対にスラれる（「スリ被害にあう」の意）」、「女の子が一人で行く場所ではない」、「誘拐される」などのバラエティーもあった。とにかくナポリ行きを伝えると十中八九ナポリのネガティブキャンペーンが開始されるのは請け合いであったのだが、得てしてこれらはナポリどころかイタリアにすら行ったことのない人間から浴びせられる言葉であり、一方でナポリに渡航経験のある人からは意味ありげな微笑で「色々と気を付けて」と言われるとともに、「絶対にもう一度行きたくなる街」と言葉添えを頂くことが多かった。そして私はこうした”LUOGHI COMUNI(ステレオタイプ)”の真相と渡航経験者のその微笑の意味をナポリでの日々の中で身をもって実感していくのである。

交通機関の大規模ストライキ、お祭り騒ぎで紙吹雪とゴミまみれになる石畳、至る所がスプレーペイントで埋め尽くされた外壁、アパートの路地で窓から窓へ無数に垂れ下がる洗濯物、とにかくアジア人というだけで引っ切り無しに絡んでくるナポリ人など絵にかいたようなカオスナポリの洗礼を受ける一方で、ヨーロッパ美しいといわれる地下鉄の駅、スプレーアート壁の向こうに広がるひっそりとした住居空間、ナポリ人のおせっかいが過ぎる親切心、職人技の生きた精巧な造りのナポリ人形、町の至る所に散見する第二次世界大戦の爪痕など折に触れてナポリへのイメージを覆される瞬間に出会った。語学学校では、インドネシア、スペイン、ドイツ、オーストリア、オランダ、イスラエル、アメリカ、ロシア、中国など挙げるときりがないほど本当に様々な国からイタリア語を学びにここナポリへ来ていたのだが、ナポリにはそれほど世界中の人を惹きつけて止まない魅力があることがここでも伺える。語学学校では午前中にディスカッションやプレゼンテーション中心のレッスンを受け、午後には遺跡での課外授業や、ナポリの郷土料理・音楽の歴史についてのレクチャーを受けたり、課題準備をしたり、アクティビティーとしてナポリ周辺の観光へも赴いたりした。確かにナポリは治安などの面で危険な部分もあるが、それは欧米諸国ならばどの国も変わらない程度のレベルであるし、夜道の危険度で言ったならば、日本のそれと殆ど変わらないようにも感じる。日本にだって治安の悪い地域というものは必ずあり、ナポリが取り立てて危険というのは、数多のブランド品のショッパーを引っ提げて庶民の足である地下鉄を利用するとか、ニコンカメラにシャネルのバッグでフードコートの席取りをすとか、よっぽど観光浮かれして注意力が散漫になっているなどの場合に限った話であるように思う。それどころか、危ない目に合いそうな時にはナポリの人間は予め注意喚起をしてくれたり、親切に案内してくれたり、イタリアの他の街に比べても遥かにあたたかく居心地のいい場所なのである。これぞイタリア！という理想のイタリアと、外国でいて外国でないような温かさや安心感を併せ持つ理想のイタリア。それら二つの理想を併せ持つイタリア像がここナポリには確かにあり、それが文化も歴史も自然もひっくるめて、カオスな街に魅了される人が後を絶たない理由なのだと感じさせてくれる。

ところで、ただ単に「外国語を学ぶ」という目的のみを考えるならば、情報伝達手段の発達した現代では現地に赴かずとも、日本国内で本を買うなり、ネットを利用するなり、語学学校に通うなりでそれなりの努力をすれば十二分な学習効果を得ることは出来る。それにも関わらず、たくさんの手間と時間とお金をかけ、海外留学を行うことにどのような意味合いがあるのだろうかと考える人も少なくないように思う。現に留学と称した「物

見遊山」でそれら 20 代での有限な資材を無駄にしているように見られるケースも、はたまたこのような「遊学」を幹旋するような企業も存在する。実際に私自身のイタリア留学も日数にしてみればわずか 2 週間ほどであり、たかがそれだけの日数でいったい何が学べるというのだと言われても然るべき「超」短期留学を行ったその一人でもある。それでも私は本当の意味で外国語を学びたいと考えた時、まどろっこしい過程を経て、背負わなくてもいい苦勞を背負い、時間とお金をつぎ込んでまでも行われる留学には、大いに意味があると考え。いざ原点に立ち返り、なぜ外国語を学ぶのかという問いを見つめなおしたとき、その解は自然と導かれるのではないだろうか。私は、例えば外国語で日記を書く為だけなどの、自己完結型のツールとして外国語を学ぼうとしているのだろうか。否、私だけに限らず多くの人々が、他者の介在した双方向性のコミュニケーションツールとしての外国語の習得を目標としているはずである。どんなに正しい文法も、技巧を凝らした文章表現も、その言語が使われる文脈や背景、文化を知り得なければ、相手へと発信したその文字配列や発話音声は何の意味も持たない記号や音声と何ら差のないものに成り下がってしまう。このような言語の裏に脈々と流れる血とその鼓動を感じ、それらを自分自身の言語に落とし込むということは、やはり現地に赴き生の言語や文化に触れることで実現可能になるのではないだろうか。

さて、薬学部のカリキュラムとは想像以上に身の詰まったものであり、いざ留学しようと考えても、スケジュールのことや試験などあれこれ考えると尻込みしてしまう気持ちにもなる。例え 2 週間足らずの留学でもそうした連続的な休暇を取るのも一筋縄ではいかず、再試験にかからないように勉強せねばなどと考えつつも、留学前の書類作成や各種手配、留学資金の確保のためのバイトなどを同時並行で行うことを思うとなかなか前向きな気持ちにはなれないこともあるだろう。それでも諦めずにチャレンジしてほしいと思うのは、例え超短期であっても今この瞬間の海外留学が必ず自分の中の価値観を覆し、再構築するチャンスだと思うからである。個々の留学で達成されること、感じることは人それぞれだが、私の周囲で海外留学を経験した友人たちは、帰国後に顔を合わせた際、見違えるように輝いて見える。恥ずかしい暗喩表現に見えるかもしれないが、これは例にも漏れず真実で、発言の裏から滲み出る自信や自分自身の経験への誇りから留学経験というものは人を一回りも二回りも大きくしてくれるのだと改めて実感させられる。

本当の意味で外国語を学びたい、自分自身を変える経験をしてみたいと少しでも感じたなら、長期休暇を利用し海外留学を行うことを大いにお勧めする。幸い本学には国際交流基金助成事業の支援制度があり、金銭的な面でのフォローアップを行ってくださっている。きっかけは何でも構わないのだと思う。今が一生懸命ならば、意味合いなどは後から勝手についてくる。

あなたの海外経験で異文化交流の黎明期にある本学に一風吹かせてみてはいかがだろうか。

最後に、国際交流基金助成事業申請、承認にあたりお力添えを頂きました諸先生方、学生課の皆様にご改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



語学学校にて、授業の一環として折り紙で手裏剣づくり



ベスビオ火山、ナポリ湾を望むサントルチアにて



イスキア島にてオランダ、ドイツからの友人と